Bits of Knowledge

About "NPO"

NPO豆知識

今回のテーマはNPOへの寄付。
「支援したいNPOをどうやって見つけるか？」皆さんはご存知ですか？
本コーナーではNPOの謎めいた実体を
NPO初心者のタチバナくんと一緒に学んでいくコーナーです。

タチバナくん(31歳)
社会貢献に興味があり、これから活動していきたい31歳。NPOには全くなじみがない。（先礼極まりない態度でズケズケと質問する）

ふら美先生（年齢非公開）
NPOセンターに勤める丁寧なサポートが評判のお姉さん。（基本優しいがたまに怖い）

今日の？ Hatena

寄付は人の心を幸せにする？

先生！この前の講義で寄付がNPOにとって重要な収入源ってことがわかったけど、日本人ってどのくらい寄付したことがあると？世界の国と比較したらどうなんやろうか～。

こんにちはタチバナくん。2015年の寄付白書（※1）によると、日本で寄付したことがある人は全体で43%になります。そのうち、NPOや市民活動への寄付経験は45%であり、他には自治町内会や宗教活動への寄付も含まれています。年代別では、年齢が上がるにつれ寄付率は高くなり、60歳以上では半数以上の人が寄付をしています。タチバナくんの世代は23%です。ちなみに世界に目を向けると、世界一寄付への意欲が高い国はミャンマーで、その寄付率は91%との数値があります。2位はアメリカで、日本は残念ながら114位と低いですね。（※2）タチバナくんは寄付したことありますか？

■日本人の2014年寄付先分野別トップ3（※1）
- 緊急災害支援 17.4%
- 国際協力・交流 10.1%
- 社会貢献活動の中間支援 6.3%（中間支援とは、NPOを支援するNPOの活動のこと）

寄付しようとしたことはあるっちゃけどね。地域の伝統文化を守る活動に興味があってネットで検索してみたっちゃけど、なんかよくわからんで諦めてしまったっちゃん。

いきなり団体を調べるのは難しいかもね。まずは、近くのNPOセンターへ行ってみて、チラシやパンフレットを手に入れてみてはどうかな？意外と知らなかった地域の団体の情報を発見できますよ。

えっ？そんなとこあるって全然知らんやったー。どこに聞いていいのかも分からんやったっちゃんね。

タチバナくんの住む宗像市には、市民活動・NPOボランティアセンターがありますね。「○○（地域名）」と「NPO」「ボランティア」などのキーワードでネット検索するとセンター情報が出ます。センターによっては、団体の情報をまとめた冊子やファイルも設置してあるので、情報収集に役立ちますよ。めぼしい団体が見つかれば、ネットで検索してWEBサイトを閲覧したり、団体が主催するイベントや説明会に行ってスタッフと接して判断するといいと思います。

先生ありがと！じゃあ忘れる前にセンター行ってみることにするバイ！

NPOやボランティアを調べるタチバナくん・・・そして２週間後

先生！応援したい団体は見つけたけん、早速寄付したらお礼の手紙がもらったっちゃん！そこには、自分の寄付が伝統文化を伝える冊子の製作に使われることが書いとって、その活動の一員になった気がして嬉しかった～！

寄付はNPOを支援するものでありながら、実は寄付する人の心を豊かにすることができるんです。カナダの心理学者エリザベス・ダン博士は、その著書の中で「他人のためにお金を使うこと」が「たくさん稼ぐこと」と同じくらい自分にとって報酬になるとの研究結果をまとめています。（※3）今のタチバナくんはとってもいい笑顔になっていますよ。

監修／仮認定NPO法人アカツキ

出典：（※1）「Giving Japan 2015 寄付白書2015」日本ファンドレイジング協会 発行　（※2）「2015年世界寄付指数」Charities Aid Foundation（イギリス）／The Gallup Organization（アメリカ）発行　（※3）「「幸せをお金で買う」5つの授業 ―HAPPY MONEY」エリザベス・ダンほか著 KADOKAWA/中経出版 発行

Local × Design Academy MUNAKATA

［ローカル×デザインアカデミーむなかた］

企画イベント開催しました！ LDAまとめレポート

LDAから生まれた2つの企画

Local×Design Academy（以降、LDA）参加者によるイベント「日の里団地から繋がるむなかた食材～団体で極上の味噌づくりを体験しよう～」が開催されました。参加者は、最近宗像に移住してきた人や、糸島など市外から集まった11人。農園での大豆収穫に始まり、団地内で、むなかたの食材を使った昼食、その後味噌づくりが行われました。参加者からは「これからどのような味噌に仕上がるのか楽しみ」や「移住者なので、この場に参加することで人とのつながりができてよかった」などの声が。

イベントの企画立案をした山田雄三さんは「食を通じて人とのつながりをこれからも作っていきたい。今回だけでなく継続的な取り組みとしていきたいです」とこれからの抱負も語ってくれました。

もうひとつは、小田淳さんを中心に企画した「わんばくっ！」。お椀とお箸を持ってまちを巡るという発想から、岬地区のグルメと文化に触れる企画が生まれました。地元の人やお店、漁師さんやその奥さんに協力をお願いし、マップ作りからタイムスケジュール、岬の美味しいもの選びまで丁寧に準備。子どもから年配者まで20人が集まり、まるで大家族のような和気あいあいのまち歩きになりました。

11月19日（土）LDA内で企画立案した味噌作り体験を形に。

漁師さんたちから話を聞くイベント参加者。11月23日（水）鐘崎漁港にて。

OUR TREE HOUSE PROJECT

Column Vol.03

この場所でツリーハウスをつくる。その先に…

2015年秋から一年かけて、自然あふれる牧歌的な田舎の村にツリーハウスを作るプロジェクト。ツリーハウスを作りたい人が集まり、ハウスだけではなく石窯やコンポストトイレなども作る。どうやって自然を楽しむかは参加者次第。月一回土日に開催し、20～40代までの参加者が自然を楽しんでいる。

プロジェクトプロデューサー
谷口 竜平さん
僕らのツリーハウスプロジェクト
ourtreehouseproject.com

Willを広げる。

以前は会社員としてデザイナーをしていた谷口さん。人との関わりが少ないといわれる世界で、どうやったら自分のデザインで人の心を動かせるのか想像を巡らせる。自分の作品のメッセージは伝わっているのか？担当者とのやりとりを重ねるごとに自分の思いが捻じ曲げられていくようだった。作らされている？いや、そもそも自分は作品の向こうにいる人を見ようとしていたのか？自分こそ思い込みの中にいたのではないか？

デザイナーとして「やりたいこと（will）」「できること（can）」「やらなければならないこと（must）」が見えていなかったことに気づいた。「自分はリアルな人の表情が見たい」という欲求が湧き上がってきた。そこから仕事に変化が表われ、ツリーハウスプロジェクトが生まれた。

形になるツリーハウス。

プロジェクトの中でそれぞれの参加者の中に生まれる「will」。willが膨らむと発見が増える。お湯を沸かす手段以外の魅力が写真からもわかる「スウェーディッシュトーチ」。中学生の子どもとお父さんは、日常ではできないアナログ体験から、親子の関係だけではなく、互いの人としての良さをカウントしていく。作業を通して見える道具の使い方、ひらめき、力の入れ具合など、工夫に気づき、人と人の距離が縮まる。「人の知恵が詰まった簡単な道具を楽しみたい」。willがまた一つ広がった。

プロジェクトもデザインももっと一緒に楽しみたい。彼が作る場に足を踏み入れると、人は表情を緩ませる。

むなかたNPOマガジン ふらぐ vol.15
2016年12月24日（年4回）発行　編集：むなかた市民フォーラム　編集長／立花裕平　編集委員／雪松亜子・堤麗みき・仲西治一　デザイン／谷口亜芹　表紙イラスト／イサヤマナオヤ（instagram@naoya_isayama）
発行／〒811-3437 福岡県宗像市入間150 メイトム宗像　宗像市市民活動・NPOボランティアセンター内　編集部☎0940（36）0311　E-MAIL：munakata@mcforum.jp

むなかたNPOマガジン　Vol.15 WINTER

ふらぐ

この世界には
ロマンがある

¥0
TAKE FREE

目からのうろこ！ 7つぶん

認定NPO法人SOS子どもの村JAPAN
活動資金は地域に根ざしてこそ。

NPO豆知識
寄付は人の心を幸せにする？

イベントレポート
ローカル×デザインアカデミー企画イベント

▶その道のプロが薦めるこの一冊！
▶NPO入口図鑑
▶［コラムVol.03］ツリーハウスをつくるその先に…

表紙イラスト／イサヤマナオヤ（napsac）

目からのうろこ

第7つぶめ

好奇心旺盛なタチバナくんがまちの面白いヒト・モノ・コトを現地まで飛んで取材してきました。

認定NPO法人SOS子どもの村JAPAN

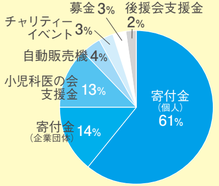
活動資金は地域に根ざしてこそ。

昨年SOS子どもの村JAPANが集めた寄付はおよそ5800万円、支援する会員数は800人を超える。これだけ多くの共感を得るための秘訣とは?

■2015年度収入内訳

会費	2700万
寄付	5800万
助成金	1350万
行政委託事業	4100万

■2015年寄付金の内訳



常務理事
坂本 雅子(さかもと まさこ)さん

小児科医として病院勤務を経て、福岡市の保健部長、福岡市助役などを歴任。2003年から福岡市相談役、福岡市子ども総合相談センター名誉館長に就任。SOS子どもの村JAPANの設立から関わり、現在は常務理事。

事務局長補佐／広報FR
藤本 正明(ふじもと まさあき)さん

東日本大震災を契機に東京から福岡へ移住。その後、団体の事務局員となり主にファンドレイジングなどを担当する。

動き始めた日本の里親制度

福岡市では2004年に家族と離れて暮らす子どもたちが447人と急増した。この現状を受けて、2005年から福岡市でファミリーシップふくおかという里親を増やす取り組みが児童相談所とNPOの協働事業で始まった。年に2回フォーラムなどの啓発活動を行うことで、市民の里親への関心は徐々に高まり、里親の登録数と子どもの里親委託率は大きく改善された。そして、この活動の中から「子どもの村」は生まれることになる。様々な人や企業、行政の後押しを受け、福岡市西区今津が候補地に。正式な決定には住民の合意が必要不可欠だった。「当時は社会的養護の子どもたちへの理解は進んでおらず、開村に向けては、住民の反対も大きかったです。住民との話し合いの場を根気づよく設けることで、ようやく合意を得ることができました」と常務理事の坂本雅子さんは当時を振り返る。

子どもを家庭で育てるために

団体の活動は大きく「子どもたちの養育」「困難を抱える子どもとその家族のための支援」「人材養成プログラムの開発」「アドボカシー(社会啓発・政策提言)」の4つ。その中心を担うのが、子どもの村福岡の運営である。村内には、5つの家とサポートのための「センターハウス」、集いの場となる「たまごホール」が設置されており、地域で一体となって子どもを育てる方針で、これまでに57人の子どもたちを育ててきた。子どもの村を運営していくには、毎年1億を超える多額の費用が必要になる。その費用を賄うための収入源は、大きく「会費」「寄付金」「助成金」「行政委託事業」で構成される。

なぜこれだけの寄付や会費を集めることができるのか?

全体の収入の中で最も大きな割合を占めているのが、個人からの寄付金である。実に全体の約61%を占めている。これだけ多くの寄付を集める秘訣を4つに分類してみると、まず1つ目は、解決したい社会課題が明確に把握しやすいこと。パンフレットやWEBサイトには課題や現状が明確に数値化されており、問題の重要性を把握しやすい。広報を担当する藤本正明さんは相手に合わせた伝え方にも工夫を凝らしているという。「支援をお願いする際、企業に説明する時は数字のデータを使って論理的に説明をしますが、例えば、お子さんがいる主婦の方に向けてだと数字よりも“活動の想い”をベースに伝えるようにしています」。2つ目は、ありとあらゆる手段を使うこと。活動説明会や募金活動に始まり、チャリティーにつながる自動販売機の設置、チャリティーイベントの開催など実施する内容は多岐にわたる。募金活動はヤフオクドームで実施したり、女子高生と協力して行うなどアイデアも豊かだ。ひとつの内容に固執せず、多様な草の根活動の積み重ねが大きな成果へとつながっている。3つ目は、活動を下支えする支援の会の存在。活動をサポートする小児科医の会は、県内の小児科医が会員となり毎年支援を行っている。設立から5年間支援した後援会では、福岡を代表する企業の経営者が理事として名を連ね、活動を強烈にバックアップした。支援を募る資金部会では、企業経験豊富な理事が様々な人脈を活用し支援金集めに奔走している。過去にはチャリティー歌舞伎やチャリティーゴルフなどのイベントも開催された。この支援者の存在は、団体にとって大きな糧になっているのではないだろうか。

最後に、認定NPO法人の取得も大きく影響したと常務理事の坂本さんは語る。「税制上の優遇措置がある認定NPO法人の取得をきっかけに寄付額は大きく増加しました。社会的に活動が認知されたというひとつの基準にもなりますので、支援を集めるためには必要不可欠だと思います」

■4つのポイント

1	広報手段	解決したい課題が明確に数値化されている
2	手足を動かす	ありとあらゆる手段を使う
3	人脈を活かす	後援会や支援を募る部会の存在
4	制度の活用	認定NPO法人の取得

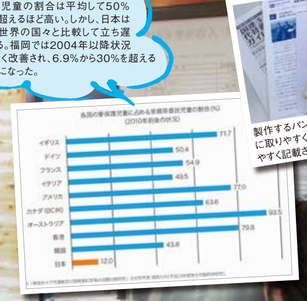
自分たちは福岡のいちローカルNPO

今年6月にはSOS子どもの村インターナショナル総会で正式に加盟が決定し、国際機関の一員として新たな一歩を踏み出した。国際的な団体となったにも関わらず「自分たちは福岡の、いちローカルNPOという気持ちは変わりません。これからも地域に根差した活動を行っていきながら、全国へ向けて福岡で取り組むモデルを広げていけたら」と藤本さん。地域に根を張り、住民から信頼される活動を地道にコツコツ展開していくことが、多くの人からの共感を得る一番の近道だと感じさせられた。

SOS子どもの村JAPANとは?

家族と暮らせない子どもたちと、その危機にある子どもと家族のために活動している団体。1949年にオーストリアで発祥し、「すべての子どもに愛める家庭を」のスローガンのもと、現在世界135カ国で活動を展開。そのモデルをぜひ日本で展開したいと、2006年に「子どもの村福岡を設立する会」を立ち上げ、その後4年の準備を経て、2010年4月に日本初となる子どもの村福岡を開村。2014年には、仙台市に国内で2番目となる子どもの村を開村した。

世界の主要国では、里親等の委託児童の割合は平均して50%を超えるほど高い。しかし、日本は12%と世界の国々と比較して立ち遅れている。福岡では2004年以降状況が大きく改善され、6.9%から30%を超えるまでになった。



製作するパンフレットや広報媒体。手に取りやすく内容もシンプルにわかりやすく記載されている。

取材の様子。スライドを使って説明する藤本さん。

名刺の裏にも団体のメッセージが記載されているなど細かな工夫が。

子どもの様子

ヤフオクドームでの募金の様子。女子高校生と一緒に来場者へ募金の協力を呼びかけた。

子どもの村の全景。

Introduction of the recommend book

その道のプロが薦めるこの一冊!

時々「怖い」と思うことがあります。大勢の人の前で自分の想いを話す時。あるいは、SNSでメッセージを発する時。もし間違ったらどうしようと、不安がよぎります。LGBT関連のNPO法人を立ち上げる時もそうでした。カミングアウトによって何が起こるのか予想もつきませんでしたが、私の背中を押してくれたものの一つがこの本でした。幼い頃から自分の身体に違和感を持っていた著者が、男性として生きることをやめ、女性として暮らすようになった経緯。世田谷区議会議員として、困難を抱える人々の声を受け止めどのように変えてきたか、胸が熱くなるストーリーが収められています。沈黙は「存在しない」こと。だから勇気を出して声をあげようと、読み手を励ましてくれる一冊です。

紹介者
NPO法人Rainbow Soup 代表
小畠(こいわ) ローマさん

福岡・東京の2拠点をベースに、レズビアン当事者としての経験を踏まえてLGBT(性的マイノリティ)関連の情報発信・啓発活動に取り組む。企業・学校・行政・一般向けの講演実績多数。

NPO入口図鑑 Vol.03

「ちょっと気になったこと」
その先にあるNPOへの入口を人物像から
明らかにするコーナー

Profile 本田 正之さん
(特活)NGO福岡ネットワーク
インターンを経験し、卒業後常勤職員として勤務
http://ngofukuoka.net/

キーワード「そん仕事合っちょるね」

宮崎県の中心部から離れた西臼杵郡で育った本田正之さん。ここから出たい。そう思っていた高校2年生の冬、スマトラ沖地震が起こり海の向こうの世界に目が向いた。

大学では専門的になりすぎず広く世界を捉えていきたいと国際関係論を学んだ中で、「問題を解決するためには制度を変える必要がある」と政策提言の活動に興味を持つ。そんな時、大学の先生の紹介で国際協力NPOの中間支援組織「NGO福岡ネットワーク」を知る。

日本での活動が、現地で取り組む団体や住民にどのように活かされているのか。中間支援の仕事はわかりにくい。しかし、彼自身は自分の役割と重要性を実感できた。それは、彼の両親からの言葉でわかった。

4人兄弟の末っ子で、いつも兄や姉のすることを見ていた。周りの人の動きから立ち位置を考える。自分の行動で周りがどう変化するのか予測できたのだ。「そん仕事合っちょるね」と話す本田さんの家族。彼が持つNPOの入口に、最初に気づいていたのかもしれない。

Furagu News

「伝えるコツ」セミナー ～NPOのコミュニケーション力は、ちょっとしたコツでアップする～

良いことをしているのに伝わらないのはなぜ?どうすれば活動のことをわかりやすく伝えられるの?自分たちのことを「伝える」ためのちょっとしたコツを、広報のプロに学びます!

アドバイスを出し合うチラシ(先着6団体)募集!各団体のチラシをプロに添削してもらえるチャンス!

［講師］伊藤公一 氏
(株)電通 エグゼクティブ・クリエーティブ・ディレクター
Honda・花王・日本航空・全日空・サッポロビール・ニッカウイスキーなどを担当。Hondaのクリエーティブ統括をつとめる。朝日広告賞グランプリ、毎日広告デザイン賞など広告賞受賞多数。2012年クリエイター・オブ・ザ・イヤー。

［日時］2017年1月28日(土)13:00～17:00(受付12:40～)［参加費］1,000円［定員］30人(抽選)［対象］NPO・市民活動をしている人
［会場］CoCokaraひのさと 住所:宗像市日の里1-31-1(JR東郷駅 日の里口)※駐車場が少ないため、公共交通機関でお越しください。［締切］参加申し込み1月18日(水)

申込方法 団体名・氏名・電話番号を下記のアドレスまでメールにてお知らせください。※添削してもらいたいチラシがある場合はそのデータも添付してください。
Mail:munakata@mcforum.jp(メイトム宗像市民活動・NPOボランティアセンター宛)

■主催:むなかた市民フォーラム／Tel:0940−36−0311(宗像市 市民活動・NPOボランティアセンター)■協力:NPO広報力向上委員会、日本NPOセンター、電通